



## 新年のご挨拶

安芸農業協同組合  
代表理事組合長 永山 洋介

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

皆様方におかれましては、お健やかに新年をお迎えのことと存じます。

昨年は、異常な円高、欧州の経済不安、近隣諸国との外交問題等で政治が大きく揺らぎ、日本経済に打撃を与えた 1 年でもありました。

そうした厳しい状況のもとで衆議院選挙も行われましたが、本年は内政・外交とも真の浮揚を期待するとともに、皆さまにとりましてもよい年になりますことを祈念しております。また、東日本大震災による復興・復旧の遅れ、福島第 1 原発の放射能漏れと風評被害が続き、多くの農家も再建に苦慮されておられます。

当組合としましては、募金活動、支援物資の提供、農地復興のための人員派遣等を行なってきましたが、いまだ復興には遠く及ばない状況を勘案しますと、今後とも引き続き、「協同」の理念に基づきまして支援してまいりたいと考えております。

さて、昨年に管内各地で開催されました農産物品評会では、出品点数も増え、品質的にも向上しており、農業振興の一環としまして今後とも支援してまいりたいと考えております。

米の情勢ですが、管内作況指数は 102 と平年並みでしたが、当組合で行なっております独自買入れでは 9,232 袋（平成 23 年度 7,993 袋）と大幅に増加いたしましたし、1 等米比率も 50% と回復してまいりました。

昨年には、農業電子図書を各支店及び各拠点購買センターにタッチパネル式で皆様にも簡単に農業に関する情報を提供できるようにしておりますので、ご利用ください。

今後とも農家・組合員様のご期待に添える「JA 安芸」を目指し、役職員一丸となって邁進する所存でございますので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

## エコファーマー推進実証展示圃の報告

今年度は、「JA 安芸こだわり米」の生産が 1,500 袋/30 kg ありました。今年度も「JA 安芸こだわり米」生産を行っている生産者の圃場に看板を立て、栽培基準に添って栽培していただきました。エコファーマーは、化学肥料と農薬の使用を控え土づくりを行った栽培方法で持続性の高い生産方式として広島県は導入を促進しています。

その内容は、有機質資材施用技術（粗大有機物の施用、500kg/10a 以上。）化学肥料低減技術（有機質肥料の施用により、化学合成窒素成分 6.4kg/10a 以下。）化学農薬低減技術（温湯種子消毒技術の導入等で、化学合成農薬使用回数（成分カウント）16 回以下。）となっています。

今回「こだわり米」を栽培しているエコファーマー推進実証展示圃の栽培履歴を見ると次の通りでした。有機質資材施用技術（粗大有機物の施用、1~2t/10a 投入されておりました。）化学肥料低減技術（有機質肥料の施用により、化学合成窒素成分は 1.8~4.7kg/10a でした。）化学農薬低減技術（温湯種子消毒技術の導入等で、化学合成農薬使用回数（成分カウント）10~14 回でした。）

「JA 安芸こだわり米」は県が促進しているエコファーマーに適合しておりました。また、JA 安芸こだわりヒノヒカリは、美味しいと喜ばれています。

## 米の検査状況

24 年の稲作は植付け後の低温による初期生育の遅れなどがありましたが、梅雨明け以降は好天に恵まれ、収量・品質とも向上しました。収量は（作況指数県南部 102）やや多いでしたが JA 安芸では昨年より 16% 程度多く検査することができました。ありがとうございました。

カメムシ類による斑点米が目立ちましたが、1 等米比率は 50% と高い水準となりました。

今年度も栽培履歴回 平成 24 年 12 月 25 日現在 袋/30 kg

名 柄	1 等	2 等	3 等	規格外	合 計
コシヒカリ	585	784	21	50	1,440
ヒノヒカリ	2,938	2,434	578	39	5,989
JA 米ヒノヒカリ	982	483	33	2	1,500
あきるまん	88	83	23	40	234
その他	10	56	3		69
合 計	4,603	3,840	658	131	9,232

収にご協力いただきまして大変ありがとうございました。回収させていただきました履歴を分析検討し、今後の営農指導に役立てたいと思っております。来年度も引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

## 農業祭開催！

熊野町農業祭が 12 月 2 日に盛大に行われ、農林産物品評会では、総出品数が 752 店あり平成 23 年に比べ大変多くの出品がありました。品評会の気付きとして、少雨の関係で害虫被害の多い年でした。あぶらな科に被害を与えるキスジノミハムシやヨトウムシ類による被害が目立っておりました。あぶらな科の植物で貝割れ葉が開いたらすぐ葉に小さな穴ができます。これはキスジノミハムシの成虫がかじった跡で地際に産卵して幼虫が根に

熊野農業祭



傷を付けます。早目の薬剤散布が防虫被覆材による防除を行いましょう。また、果実では小ぶりの物が摘果を行なわないと良い物ができませんので必ず行うようにしまししょう。今回も皆様が丹精込めて生産された良いものが多く出品された品評会でした。

同じく 12 月 2 日に坂町民体育館と小屋浦ふれあいセンターで、坂町農産物品評会が行われました。総出品点数は 327 点でりっぱな農産物が多く出品されて、坂町長賞・JA 安芸組合長賞を初め多くの方が表彰されました。その中で、



地域の農家の方が保育園児に畑でトウモロコシ・サツマイモ・ダイコン等を種まき～収穫～食べるところまで体験させ模造紙の中に絵と写真で、（一生懸命作業しているところ、食べた時の喜びの様子等）まとめて掲示してありました。品評会では、一緒に作ったダイコンが展示され特別賞に入賞いたしました。食農が叫ばれる中、とても良いことだと思いました。

坂町農産物品評会



## .. 土についていろいろ書いてみました ..

土を物理性・化学性・生物性に分けてみます。

物理性 土の中には、固相、液相、気相の部分があり理想的な割合があります。それは、固相率が30~40%、液相率 30~40%、気相率 20~30%が畑の土の最適バランスです。管内の土は、どちらかと言うと砂のような固形物が多く固相率が高い状況です。(土壌診断の結果腐植含量が不足しているところが多い)固相率が高いと硬い土になります。畑に指を刺してスポット軽く入る土が良いと言われる。これは、液相率、気相率が高くなるとそんな土になります。液相率、気相率が少ないので日照りが続く乾燥しやすい土になります。雨が降ると水でいっぱい状態になります。じゃがいも、にんじん、サツマイモ等が割れていることがあります。このように天候の影響を受けやすい土は、このような障害が発生しやすくなります。一般的に改善するためには、堆肥を使用します。堆肥は比重が軽く液相率、気相率の部分が大きいので土の物理的改善に使用されます。仮に、土の比重を1にするために、堆肥をどれくらい入れたらよいか計算してみると、土によっては30~50t/10aも入れることになる土もあります。一度には経済的にも労務的にも難しいので毎年、毎作少しづつでも入れていくことが、大切になります。堆肥等の有機物は分解して腐植酸と言う物質を作ります。分解は、畑で年間 2t/10a、水田で年間 1t/10a と言われる。堆肥の状態を直接土の中に液相率、気相率の部分を増加させることができますが、肥料分を多く含んでいると養分過剰になるので一度に多く施すことができません。また、未熟な堆肥は分解する時にまわりのチッソを取ることで植物がチッソ不足になることがあります。そこで、堆肥を多く施して土の物理的改善をする為には、完熟でチッソ分(1%以下)ほとんど入っていないものが良い堆肥と言われる。堆肥が分解してできる腐植酸は、土の中でのりの役割をすと言われます。土の非常に小さい粒をコロイドと言います。コロイドを集めて粒にする働きをします。コロイドの粒になると粒と粒の間には、少し大きなすき間ができて、大きなすき間と小さなすき間ができるので、そこに、水、空気が存在できるようになります。この水と空気は植物に利用されやすい状態で長く存在するので、堆肥を充分に入れ腐植酸により土の物理性がよくなった土を物理面では良い土と言えます。(このような土が、肥持ちが良く、排水性が良く、保水性の良い土といえます。)

化学性 化学性と言うとちょっと解りにくいですが、肥料分がどのような状態かを言います。肥料は、1 回施すと収穫まで施す必要がなければそれにこしたことはありませんが、普通、元肥と何回かの追肥をします。(少し高くなりますが、元肥一発肥料と言うものもあります。)まずは、植物が生育するためには酸度と言う土の環境があります。一般的に野菜はPH6.0~6.5 の弱酸性を好みますが、作物によって多少違います。資材としては、炭酸石灰、苦土石灰、ミネGスーパー等が使われます。(Caイオンによって調整します。)日本の風土から雨が降ったり、有機物が腐ったり等で自然な状態では、酸性に傾くので年に 1~2 回石灰を入れて調整します。最近ではハウスとか、露地で多量に施したところではアルカリに傾いている土も見られます。アルカリになると微量元素が吸収できなくなったり作物の生育環境に合わなくなり生理障害を起こします。また逆に酸性に(約PH5以下)傾き過ぎても

微量元素は吸収されにくくなり作物の生育環境に合わなくなり生理障害を起こします。次に肥料の代表成分はチッソ肥料です。これから「作付しよう」「元肥を入れよう」と言う時には、土の中に肥料が残って無い方が基準量の元肥を入れられるので良い状態です。露地栽培の場合、雨で流れてしまうので基準量入れて出発するのが普通です。また、肥料は、施した量の半分ぐらいいは流亡して作物には吸収されません。元肥一発肥料、施肥後マルチを掛ける、ハウス栽培などは流亡しにくくなるので施す量が節約できます。作物によって作物が生育するにしたがい吸収量の違いはありますが、常に適当な肥料分がある土が良いと考えられます。有機質肥料(油粕、鶏糞、魚粕、ぬか等)は一度に多く施すことはできませんが、土の中の微生物によって分解され徐々に肥料化します。その内何割かは、長い間土の中で分解して肥料として効きます。使い続けていると蓄積して肥た土になります。注意しないといけないのは、手間と腐敗時の匂い、ガスの発生、虫を寄せ付けやすくするので、堆肥等と積み込み発酵させてばかし肥をつくり施すのが良い方法です。りん酸は、作物の小さい時に吸収量が多いと言われ、土の中では移動しない成分と言われているので根の張らない地表面に施しても効果が少ない成分です。だから元肥の時にしっかりやっておきたいです。また、りん酸はアルミニウム等と結合して作物に吸収されない形になるのが問題です。それを回避するために直接アルミニウム等と接触しないように堆肥、有機物と混合して施すと良いと言われたりヨウリンのように溶性で土の酸と反応して徐々にりん酸分が溶け出る資材をなどがあります。カリはチッソと同様に水に溶けて水の移動と同じように土の中を移動します。よってチッソとカリは追肥として良く施します。最近、牛フン堆肥等にかり成分があり過剰で問題になっているところもあります。次に、置換性塩基と言うカルシウムイオン、マグネシウムイオン、カリウムイオンがあります。聞いたことのある成分だと思います。詳しいことは抜きにして、これらの置換性塩基のバランスが重要です。そのバランスが崩れると養分があっても吸収されなかったり他の養分の吸収の障害をします。これらのバランスについては土壌診断をしないと解りませんが元肥を入れる前に土の中のバランスを整えておくことが大切です。

生物性 土の中にいる微生物は 1gで 1 億個とも言われ非常に沢山の微生物がいます。微生物による働きによって作られた酵素が作物に重要な役割をしています。肥料のチッソも微生物によりアンモニアチッソ、硝酸態チッソに分解され作物に吸収されます。微生物がいなければ有機物は分解できずに肥料になりません。動物質のものを分解する微生物、植物質のものを分解する微生物等いろんな微生物が沢山いることが大切です。微生物で問題になるのは病気を発生させる微生物です。連作障害の一番の問題は病気を発生させる微生物の密度が上がって発病してしまうことです。密度を上げない工夫が大切になります。ひとつは、えさになる作物の連作をしないこと、ふたつめは、病原菌以外の菌を多く繁殖させることです。良い土を作るには、良い堆肥を入れましょう!!